

はしがき

現在、日本が直面する政治的課題は枚挙にいとまがない。たとえば領土問題や歴史認識をめぐるのは、近隣諸国とかつてないほど陰悪な関係にある。あるいは自衛隊海外派遣の拡張や沖縄の米軍基地移設の帰趨が日々の紙面を賑わせており、改めて日米同盟の重要性和問題性が吟味されようとしている。また国内政治では、小泉政権から維新の会にいたるポピュリズム政治が、既成の対立軸に飽き足りない市民の一部から支持を獲得し、現実政治を左右する影響をおよぼしている。そして2011年3月11日に起きた東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故によって、日本は長期にわたる震災復興と放射能汚染への対応を抱え込むこととなった。それは市民生活に暗い影を落とし、将来的なエネルギー政策の転換、経済発展と環境保護、中央と地方における受益と負担のバランスなど、多岐にわたる問題を提起している。これらはいずれも日本の政治的な英知とエネルギーを総動員してもなお解決困難な課題であることはいうまでもない。「戦後70年」の時点に立つて重要なことは、日本の「戦後」を誠実に振り返るとともに、「災後」の日本をどうするのか、真剣に考えることであろう。

このように問題の山積する現状は、ジャーナリズム風にいえば、外交の危機、民主主義の危機、エネルギーの危機、地方の危機、等々として表現されるであろう。しかし、現在の日本政治が真に危機的なのは、個別具体的な問題に通底する政治の「原理」そのものに揺らぎが生じているからにほかならない。明るい未来を導く処方箋として期待され機能してきたリベラリズム、デモクラシー、ナショナリズムといった現代国家を構成する政治原理は、グローバル化の進展する現代において、それ自体が新たな問題をもたらす原因の1つとして認識されるに至っている。現代日本の閉塞感と複雑で解決困難な諸課題の背後では、

われわれに自由や平等，経済的繁栄や安定した帰属意識をもたらしてきた近代の政治理念そのものが問い直されているのである。

たとえば最近の安保関連法制の成立をめぐる安倍政権による強権政治は，これまで「人類普遍の原理」として信奉されてきた，平和主義や民主主義，そしてその根底を支える立憲主義や法の支配などの諸原理をかなり乱暴に破壊したとして大きな批判を受けている。他方で，資源・環境問題，貧富の格差の増大，民族紛争と難民の発生など一国だけでは対応できないグローバルな問題も山積し，新しい「グローバル・ガバナンス」の構築が求められている。現代の政治事象は，新聞やテレビ，インターネットから入手した情報だけで読み解くことは難しい。そうした知識は，めまぐるしく変化する情報化社会ではあっという間に陳腐化し，時代遅れとなる。現実の政治争点と根本原理とを行き来しながら，目の前で起きている政治現象を歴史的・思想的洞察を活かして深く掘り下げていく力こそ，現代の政治リテラシーとして求められているものではないだろうか。

以上のような問題意識のもとに本書は構想された。前著『歴史・思想からみた現代政治』（法律文化社，2008年）は，現実政治に向けて発信することの少ない思想研究・歴史研究の観点から現代政治を読み解こうとする試みであった。この基本方針を引き継ぎつつ，今回は歴史・思想研究以外の領域を専門とする執筆者も加えて，より今日のトピックを分析の俎上に載せた。本書は2部構成をとっており，読者は「原理」と「争点」を往復しながら，抽象的な政治理念がどのような具体的論点として顕在化しているのかを考えることができる。また政治原理相互の結び付きや，政治争点間の関連についても，できるだけ明確に記述するよう努めた。日々更新される情報に踊らされて性急な判断を下したり，現実との接点を欠いた抽象論を振りかざしたりすることなく，現代の政治事象に対して批判的に接近する姿勢を身につけてもらえれば，本書の目的は達成されたことになる。また本書では，これから政治学を学ぼうとする初学者への配慮として，政治学の基本用語を本文の該当箇所でも説明しておいた。さらに各章の最後には，その章に関連する内容のコラムを掲載するとともに，若干の基本文献を紹介している。

はしがき

最後に、本書の企画から校正に至るまで編者と執筆者を粘り強く支援してくださった法律文化社編集部の方々に深く感謝したい。

2015年12月

編者一同